

第3 問題作成部会の見解

世界史 A

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問は「世界史上の建築物」をテーマとし、中国の史跡と、トルコの宗教施設を材料に、時代による変化や歴史的変遷を問うた。Aに比べ、Bの難易度は高かったが、設問としては妥当であったと考えられる。

Aでは、中国の史跡である橋の写真を題材として、その場所に関連する中国政治史上の展開を理解させることを目的として作問した。

Bでは、アヤ=ソフィアの歴史的変遷に関する説明文を資料として取り上げ、その役割の変化から、トルコの宗教政策の展開を理解させることを目的として作問した。

第2問

第2問は「統計資料を用いた授業」をテーマとし、授業中の会話文や資料から読み取った情報と歴史的事象とを結びつける力を問うた。

Aでは、近現代における主要国の経済に関する表やグラフを題材として取り上げた。いずれの小問についても、難易度は妥当であったと言える。

Bでは、清とロシア間で結ばれた複数の条約を資料として取り上げた。資料の記述から、それぞれの条約名を捉え、その成立年代や条約締結の影響下における出来事について考察する力を問うた。各小問のバランスは取れていたと考えられる。

第3問

第3問は、資料を用いた授業の場面を設定し、資料から読み取った情報と習得した知識とを活用して、歴史的事象の推移について考察させることを目的とした。

Aでは、『1610年に始まったある旅の記録』を題材とした授業を取り上げ、同じ地中海世界で起きた古代と近代の出来事について考えさせることを意図した。

Bでは、塩の流通に関して高校生が授業で発表した際に作成したメモを資料として取り上げつつ、産物やその交易が北アフリカやアジアにどのような影響をもたらしたかについての理解を問うた。いずれも適切な問題であったと評価できる。

Cでは、ネルーの著書を題材とした授業を取り上げ、資料から読み取った情報や習得した知識を活用して、歴史的事象について考えさせることを目的とした。問6は、やや難易度が高かったと思われる。

第4問

第4問は「戦争と平和に関する人類の知恵の歴史」をテーマとした。個別の問題についてはばらつきがみられるものの、大問全体でみれば妥当といえる。

Aでは、終末時計に基づくグラフを資料として取り上げた。核兵器及び原子力利用に関する歴史的な理解や、資料の読み取りを問うた。

Bでは、ある戦争時の病院内死者の死因の変化に関するグラフを資料として取り上げた。解説文の文脈から捉えた人物の事績について考察する力を問うた。

第5問

第5問は「世界史上の異文化接触」をテーマとし、中国で仏教的な世界観で描かれた古地図「南瞻部洲図」と天正遣欧使節を資料として取り上げ、異文化接触と、そこで見られた文化的特色についての理解を問うために問題作成した。

Aでは、解説文の文脈から捉えたムガル帝国で起きた出来事やインドの宗教をめぐる歴史的な背景について推察する力を問うた。あわせて、同時代の中国における歴史的な事象およびベトナムの歴史について理解する力を問うた。

Bは天正遣欧使節を通じたキリスト教布教の拡大の過程において、歴史的な事象を時系列的に捉えているか、解説文も参照し、キリスト教の布教や印刷の歴史について理解しているかを問うた。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問

Aでは、全体的に基本的な知識を問い、バランスが取れていたと考えられる。

Bの問4は、空欄に入る人名とアヤ=ソフィアの歴史的変遷について、正しい組み合わせを選択する問題であり、リード文を読み取った上で、建築物の宗教的役割の変遷について考える設問で思考力を問う良問であるとの評価を得た。一方、アヤ・ソフィアの写真から尖塔の名称を問う問5については、写真を出題に利用した点は評価でき、問いについても、名称を問うにとどまらず、包括的な問いとなっているが、例えば尖塔が設置された理由や、その用いられ方に関連する問題に発展させると思考力を問う問題になったかもしれないという課題も指摘された。

第2問

Aでは、問1・問2が、資料に関する各班の発表内容を読み解き、誤りがある発表を選ぶという新形式の問題であったが、特に問1について、3班と4班の分析は興味深く考察力を問うものとなっているという評価を得た。

Bでは、問4と問5は相互に関連性のある、考察・構想を問う良問として評価された。問6については、さらに資料との関連性を強めることが望ましいとされた。

第3問

Aでは、問2については、会話文や図とより関連させた問題にできたのではないかという意見もみられた。意図としては、同じ地中海世界で起こった古代と近代の出来事を関連付けられるかを問うものであり、その意図は反映されていると考えるが、次年度はさらに工夫をしたい。

Bでは、問5について、塩と世界史とに関連する歴史的な事象を取り上げることで、よりリード文と関連性の深い設問になったであろうという指摘があった。今後の作問で留意したい。

Cでは、問6は基本的な知識を問う問題という評価を受けた。問7は、読み取りと思考力を問う良問との評価がある一方、概念的な理解を問うための工夫が欲しかったという意見があった。

第4問

Aでは、問2について、知識を活用して思考も評価する良問との評価を得つつ、選択肢に関する改善案も指摘された。設問の方向性は評価されたと考える。

Bでは、問3が基本的な知識を問う問題で、時代の特徴などを把握することで、細かな年号の暗記に頼らずに、内容の正誤を推測することができる点が評価された。一方、ピンポイントな歴史的事象ではなく時代背景などとするなど、選択肢をさらに工夫することで、その意図は強調できるとの指摘もあった。また問4・5についても、「歴史的な知識を必要としない資料の単純な読み取り問題と知識問題とあわせた設問」や「事実的な知識の確認に終始する設問」との指摘を受けた。これらの指摘については、今後の作問に生かしたい。

第5問

Aでは、問1は、資料より、17世紀のインドが仏教世界ではないことを確認し、その歴史的背景を問う良問であるとの評価を得たが、概念的知識を問う問題として、時代の特徴を問いにしたり、または抽象度を上げた問いしたりするなど、さらに発展の余地があるとの指摘もあった。

Bでは、天正遣欧使節を通してキリスト教布教の拡大について基本的な知識を問う問題を作成した。問4や問6について指摘されている通り、今後は教科書記述をさらに配慮した問題作成に努めたい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点又はまとめ

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

内容やレベルともに日常の授業で対応できる内容になっており、難易度は標準的であったという評価を得ている。なお、一部の教科書に記載がない知識の出題があったと指摘されたが、指導要領に対応しており、問題はないと認識している。

課題として挙げられた点は、単純な知識の確認に終始する問題が依然見られるということであった。資料の提示については、昨年度と同様「意欲的な選択」であり、随所で表現の工夫が見られたと高い評価を得ている。ただし、そうした興味深い資料を提示しているものの、その後のリード文等で解説しすぎており、その結果、「せっかく資料を多く提示しても、それをほとんど生かすことなく単純な知識問題に帰結してしまう」ような問いは避けるべきである。リード文と小問との関連性も踏まえて、設問の改善に努めたい。

知識を問う問題については、前述した課題が挙げられるものの、一方で、歴史的事象の内容や時代背景を踏まえた包括的な理解を問う問題が多く見られた点に高い評価を受けた。さらに、時代の特徴や事象の意義など概念的理解を問う問題についても、より積極的に出題して欲しいという意見に対しては、問題作成する際に意識していきたいと考える。

資料の読取りから得られた内容と既習内容を関連づけさせて考察させる問題として、建築物の歴史の変遷を考察させる設問など、一定の評価を得た。こうした問題をモデルとして、今後も、資料から読み取った情報を基に、既習内容を踏まえて考察・構想させる問題や、包括的な理解や概念的理解を問うことのできる問題作成を心がけていきたいと考える。

出題のバランスについては、地域別では特に指摘がなく、地域の偏りは小さかったと考えている。時代別では「世界史A」の指導要領・教科書のテーマに即して、近世から戦後にかけての時代に重点をおき、古代・中世にかかわる問いは4問に抑えた。文化史からの出題も昨年度よりも大幅に増加させている。今後も、教科書ではなじみのない事柄についても、生活史やさまざまな技術についての資料を提示して、考えさせる問題を作成するなどの工夫を重ねたい。

以上の指摘・意見をふまえて、基礎的な歴史知識を活かした「歴史的思考」に受験者を導き、思考力、判断力、表現力等を測定する設問がより多くを占めるよう努力したい。

世界史 B

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問は「世界史上の挿絵や風刺画」をテーマとし、Aでは、明代に刊行された軍事技術書の挿絵を、Bでは、風刺画を題材とした授業の場面を取り上げ、世界史に関わる事象を多面的・多角的に考察させることを意図として出題した。

第2問

第2問は諸地域世界の結合と変容の理解を問うもので、Aはヨーロッパの拡大と大西洋世界のうちアメリカ大陸の歴史の流れ、Bはアメリカ合衆国大統領の一般教書演説を資料として産業社会と国民国家の形成の過程における選挙法についての理解を問うべく、作問した。

第3問

第3問では、中国人留学生や民族ドイツ人を題材に、人の移動の歴史について考えさせる問いを立てた。

Aの問1では、会話文を基に、中国における近代化及び排外運動の展開や、近代の指導者について理解する力を問うた。問2では、資料を基に、近代の中国における民族運動の展開について考察する力を問うた。

Bの問3では、会話文の文脈から捉えた国名を手掛かりとして、その国とドイツとが関わった歴史的事象について考察する力を問うた。問4では、会話文の要旨を読み取るとともに、その内容と同様の考えに基づく歴史的事象について考察する力を問うた。

第4問

「歴史研究における複数の資料の比較」をテーマとし、突厥についての複数の資料、権利に関する複数の資料を材料に、資料を基に考察する力や、文書成立の経緯や結果について考察する力を問うた。全般的に妥当な問題であったと考えられる。

Aでは、ある中国の史書及び東ローマ帝国の歴史家が残した記録を資料として取り上げ、内陸アジア・西アジアにおける支配勢力・王朝の推移について理解させることを目的として作問した。

Bでは、前近代のイギリスにおいて議会在国王に提出した二つの文書を資料として取り上げ、前近代におけるイギリス国王の事績について理解する力と、複数の資料の共通点を読み取る力を問うた。

第5問

第5問は「歴史研究における複数の視点の重要性」をテーマとし、Aでは、中国史の時代区分に関する複数の解釈を資料として取り上げた。Bでは、主にポリュビオスの『歴史』を資料として取り上げた。Cでは、アメリカ合衆国の景気変動に関するグラフを資料として取り上げた。

Bでは、特に、資料からの読み取りが必要な問4は、選択肢にばらつきが見られ、資料を活用できたかどうか、正誤の判断に大きく影響したと考えられる。

Cでは、いずれの小問についても妥当なものであった。

第6問

第6問は、世界史上の様々な建築物に関する資料を取り上げ、資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推させることを目的として作問した。全般的には妥当な問題であった。

Aは、複数のモスクの写真及びその説明文を資料として取り上げ、西アジア、南アジアを発祥とする宗教や、イスラーム王朝・国家の成立及び繁栄の推移について理解させることを目的として作問した。

Bの問4と問5については、概ね適切な問題であった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問

Aは、基礎的な知識を重視した従来型の設問であるという評価がある一方で、明とオスマン帝国の接点は、資料を活用することにより、教科書には記載されていない新たな切り口を提示している点が高く評価できるとあった。さらに問3についても、明に銃をもたらした存在としてウズベク人が重要な役割を果たしていたことに気付かせる良問であるという評価があった。

Bは、問6は標準的な出題内容であったと思われるが、良問であるとの評価もあった。

第2問

Aは、いずれの問いにおいても妥当であった。

Bの問4について、資料の読取りを正答選択肢以外の選択肢においても示せば、さらに良問となりえた、との指摘を受けた。また問5について、細かな事実に知識を問うものとなってしまっている、との指摘も受けた。今後の検討課題としたい。

第3問

Aでは、特に問2について良問との評価を得た。ただ、資料提示の仕方についてさらに丁寧な姿勢が必要との評価もあったため、指摘を受け止め、次に生かしたい。

Bでは、問3・4いずれも良問との評価をいただいた。ただ、問3については、深く学習した受験生ほど④を排除できないのではないかと、との指摘をいただき、問4についても選択肢の具体例を吟味するなどの余地があるとのご意見をいただいた。

第4問

Aは、全体としてバランスが取れていたと考えられる。

Bについて、問3は、リード文中の下線部に関する出来事と、リード文の解説から二つの資料の時間差と、その間の経緯を理解し、空欄を補充する組合せる問題。時制に着目しながら、推移や変化を考察させるもので、歴史科目の問題として適切かつ良問であるとの評価を得た。

第5問

Aの問1・問2は、中国史の時代区分を題材にした連動問題である。問1で異なる根拠に基づいた異なる時代区分の内容を正確に読み取らせ、問2でそれと合致する時代区分を、知識と組み合わせるうえで選ばせる形式である。難易度が高いという指摘もあったものの、複数の資料の異同や時代区分という概念への注目を促しつつ、思考・判断力を問う良問として評価された。また単純な事実としての正誤を問うのではなく、歴史解釈には多様性があり、資料根拠に応じた複数の見解がありうることを、複数正答の形式によって表現した点も評価された。

Bの問4は資料から読み取った情報を活用する必要がある点が評価され、興味深いとの意見

もあった。また、問5も基礎的な知識を問う問題であると評価されており、難易度としては妥当だと思われる。

Cにおいて、問6については時期判定が知識からなされる問題で、単純なグラフの読み取りとなっているとの指摘を受けた。出題はいずれも重要な出来事の年代を問う問題になっている。問7については基本的な事実についての知識問題との指摘を受けた。アメリカ合衆国一国の対応だけではなく、世界恐慌に対してどのような政策的対応が実施されたのかを問う問題になっている。グラフをより積極的に活用する問題へと出題形式を工夫していきたい。

第6問

Aの問1について、細かい事項への理解が問われているという指摘もあったが、難易度としては、ともに妥当なものであったと考える。問2は、問題作成の方針と照らし合わせると妥当な問題であったとの評価を受けた。

Bの問4と問6は基礎的な知識を問う問題であると評価された。問5は「何らかのテーマに基づいた年代整序とすれば、そのテーマの変容や推移などを考察する設問となったのではないか」という指摘も得たので、今後の課題としたい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点又はまとめ

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

出題の分野および地域については、改善を求める指摘はなかった。適度に分散しているということであろう。難易度も標準的であったとの評価を得た。大問数は6、小問数は33として、第一日程と比べると小問数は1つ少ないものの、分量としてはやや多いという評価であった。資料や問題文を読ませ、そこから得られた情報を基に、習得した知識を踏まえて、考察・構想することによって正答に至るような問いをすることに心がけた。指摘のあった単純な知識のみを問う問題に対しては、「大問のテーマに沿った」形での改善を進めたい。一方、事象の内容や背景などを含めた知識を問う問題や、概念的な理解を問う問題は、「単純化された暗記学習を脱しようとした出題傾向」として高い評価をいただいた。知識・理解を問う問題においては、こうした傾向を維持していくこととしたい。また、「思考力・判断力・表現力等」を問う問題については、良問になり得た問題も含めて、積極的に出題していると評価していただいた。特に、時代区分に関する問題は、「解釈や歴史観についての出題として、歴史の本質を考える上で、大変有意義な出題」で良問であったと高い評価を得た。そこで用いた複数正答や連動といった形式は、仮説検証型の問題として有効であるとの指摘は、これからの問題作成に大きな示唆を与えてくれるものである。なお、仮説検証型の問題自体における課題も示された。「複数の仮説に対し、資料や知識によって肯定されたり否定されたりしていく過程を設問とする」という提案は、検討に値すると思われる。今後も、歴史的な思考力、判断力、表現力等を求める問いを増やしていくことに、注力したい。

問いの対象については、グラフ、写真、文章資料など多様な歴史資料を提示することに努めた。資料の活用について、まだまだ改善が必要と思われる箇所もあったが、一方で、効果的に活用されている事例として、ソグド人の外交的役割や「権利の請願」の位置づけについての歴史的推移を問う問題などは、新たな包括的理解に到達するために、資料が効果的に活用されている事例として高い評価を得た。なお、複数の資料を示しながらも、それぞれの資料の関連を適切に問うことができている問題への指摘もあり、そうした点については、評価・分析からの提案も踏まえ、今後、改善していかなければならないと考えている。